JADCI News

NO. 7
1993. 10. 26

The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

Office: Department of Anatomy, Dokkyo
University School of Medicine, Mibu,
Tochigi 321-02

独創的研究に関する所感

藤田保健衛生大学
黒　沢　良　和

「独創的な研究をせよ」「独創的な研究をしたい」scientistとして誰もが望むことである。私の大学時代の恩師である江上不二夫先生は「自分の見つけたことを大事にしなくてはいけない、流行に目を奪われてはならない」、「枚挙的学問であることを恐れてはならない」と語っている。独創的な研究とは何だろう。現代はパスツールやダーウインの時代ではない。直感力に優れ、事の本質を他人より早く見抜きそれを与えられた研究環境の中でやり遂げ論文の形で発表してしまえばそれが評価される。その評価も実に時代の影響を受け、流行と離れたところに身を置いているとその仕事がいかに先駆的価値を有していたとしてもそれを真に評価できる研究者は少数に違いない。citation indexに代表される研究者の評価などがまさにそれでcitation indexの高い論文は確かに優れた論文に違いないがその研究分野がまさに流行の中心であることの証明であろう。

私は研究が独創的であるかどうかについて全く関心がない。現代のように情報があふれ新技術が続々と開発される時代にあってはすべての研究者は自分の今迄の経歴の中で得た過去によって成立しているのであり、その多くの情報の取捨選択の中から自分で勝手に組み合わせて論理を構築するのであり、それが他人にとって独創的と見えるかどうかは後になって歴史家が勝手にそう解釈するのである。要するに「やりたいと思うことを、もしやれるならば実行すればよい。」もし環境がそれを許さないならば放棄して別のことを考えてもよいし、又、環境を変えるように努力してもよいし、飛び出してもよい。それは意志の強さ次第である。この過程において独創的であるかどうかを考える余地など全くない。多くの情報は正確に集めなくてはならない。これほど多くの研究者とこれほど多くの論文が巷にあふれている。大事なことは人間が未だ誰も知らないこと、換言すれば論文の形で未だ発表されていない新事実について明らかにできる限りそれは常に価値がある。何を対象としたどのような研究であれ、それが新事実で

ある限りそのことは発表すべきであり記述して後世に残すのが scientist の努めだ。それを世の中の人が高く評価するかどうかは政治であり研究費に恵まれるかどうかも政治だ。政治が好きなら政治を行えばよい。science における政治は宣伝戦だ。scientist に与えられた唯一の特権は少なくとも研究テーマにおいて全く自由に選択できることだ。その分野がたまたま流行の分野であればそこは厳しい競争がある。競争もまた楽しいものだ。

しかし新しい技術と情報は馬鹿にしてはいけない。新技術は新しい方法論を生み１年かかった仕事を１週間に短縮する。研究が独創的かどうかを考慮する必要など全くない。若者よ新事実を見つけよう。そのプロセスは９９％までが他人の模倣であってよいのだ。残り１％にその研究者の個性が見られるものだ。そしてその１％の個性が研究者に研究者として生きてよかったという喜びを与えてくれるに違いない。

(1993.9.12　記)

日本比較免疫学会第５回学術集会をおえて

日本大学農獣医学部
渡邉　翼

今年は、夏らしい夏もなくあっという間にめっきり秋らしい季節になってしまいました。８月２５ー２７日の３日間、学術集会を本学部で開催し、無事成功裡に終了いたしました。これも諸先生方のご協力の賜物と深く感謝しております。本当にありがとうございました。

９月早々に、古田先生からこの原稿を書くようにとの指示を受けましたが、まだ、終わったばかりで残務整理もたくさん残っていたものですから、少し、気持ちの整理ができてからと、今日まで引き伸ばしておりました。さて、古田先生に怒られる前にと、ワープロの前に座ってみましたが、思い出すのは台風のことばかりで、皆様どのようにして帰宅されたのか、今だに気になっている自分を発見いたしました。あの台風11号のおかげで、協賛金集めや会場運営上の苦労などどこかに飛んでいってしまいました。と言っても、今度の学術集会では、森友、苫名、広瀬の３人の若い先生が一所懸命働いてくれ、３人の指揮の元に学生諸君が協力してくれたので、和気先生や僕などはたいした苦労をしていないのも事実ですが。まあ、これでJADCIの輪も少しは広がったのではないかと自負しております。

私には、本学会を創立された村松先生はじめ無脊椎動物の免疫を研究なさってきた先生方とちょっと違った思い入がJADCIにはあります。魚類のような哺乳類にもう少し近い脊椎動物の免疫学が、MHCと抗原提示、白血球とサイトカイン、補体と抗体の共同作業、といった起源と進化の問題を解決する糸口を提供してくれているのではないかと考えております。幸い、今年の学術集会で魚の免疫のシンポジュームを開くことができ少しはまとまった議論ができたと喜んでおります。このような考え方に広く議論の場を提供してくれるJADCIをもっと発展させていく為、今後とも努力していきたいと思っております。

比較免疫学会第五回学術集会に参加して　　山口大学医学部解剖　沢田知夫

比較免疫学会の五回目の研究集会が日大農獣医学部（藤沢市）で行われた。今夏には希な晴天のもとで始まり、「東京水浸し」をもたらした台風の風雨吹き荒れる中で無事閉幕した。我々参加者の足を気づかい働いて下さった日大の方々に、心からお礼を言いたい。

さて、私の比較免疫学に対する認識は山口大学に来た翌年、宇部の厚生年金会館でＤｒ．Ｃｏｏｐｅｒを迎えて行われた研究集会を目撃した時に始まる。それまで卵と受精しか頭になかった私には、初めて知った研究者達と研究内容にとまどいながらも未知のものに対する興味と興奮があった。研究対象の広さと、研究者人口のアンバランスが印象的な会である。そのしばらく後に定期的な集会が開かれるようになり、私も第一回研究集会から参加して宇部で目撃した人々に再びまみえることとなった。人数は少し増えたものの、やはり研究材料・対象の広さと研究者数の良いコントラストを保ち、「こんなに広い森のなかで、この限られた人間だけが宝さがしを許されている」というような、得をしたような気分にさせる集会である。その後、比較免疫学会となっても、会場の隣の部屋には常に潤滑油（あるいはエネルギー源？）が用意され、血液循環と感受性を高めた上で行われるなごやかで真剣・活発な議論には、理想的な学術討論を見る思いがする。そこにはデータの交換・検討だけではなく、何か哲学的・思想的なものが共存していると感じる。これは、この学会の創設・運営にあたる人々の情熱と学会員に対する愛情のなせる技であり、宝さがしの楽しさと会員達の宝に対する執着とが生み出すものでもある。それはつまり、財政的な面とは裏腹に、この学会の持つ豊かさを示しているのだと感じる。

今年もその学会に参加できたことはうれしい。今回は特にＤｒ．大野乾の進化に対する見方と独特の発想に触れることが出来たことが貴重だった。おまけに、例の潤滑油を注いだ後までもつき合って下さった（遅くまで迷惑をおかけしてすみませんでした）。一般演題も多く、むしろ（私自分の扱っている）ホヤ以外の研究の方にいろいろなヒントを見つけることが面白く楽しい経験だった。沢山の宝の埋まった森に入りながら、未だその切れ端すら見つけたかどうかという自分の状況を自覚して、若干の焦りと共に「そういえば、子供の頃から宝さがしではいつも時間切れだったな」と妙に昔なつかしい想いを持ちながら帰って来た。これからも、まさに研究者気質が匂うこの集まりに加わり、個性あふれる諸先輩の中で右往左往しながら、宝さがしを続けたいと思った。もともと、卵と受精と卵細胞質分極のことしか頭になかった私にとっては、ホヤの血球というのは採卵時に混入して来るじゃまくさい細胞でしかなかったが、今となってはこの面倒な細胞とつき合って行かなければならない。卵・精子は誰にでも見分けられ機能もすぐに理解できるのに比べ、この細胞のなんと分かり難いことか。血球細胞にも発生・分化の過程があり、血球幹細胞の捜索、受精時の非自己認識と血球の非自己認識の関係など発生学上興味深い問題も存在する。卵という最も無防備な細胞での生体防御機構というのも、重要な発生学上の問題だ。発生学者の中で暮しながら気にならなかった細胞や現象を発見し、比較免疫学を通して発生学の面白さを知ったということだろうか。

確実に発展している学術集会を顧みて

和合　治久

（埼玉医科大学短大）

第５回目を迎える日本比較免疫学会学術集会が、藤沢にある日本大学農獣医学部で開催されました。本学会は平成元年度に設立されましたので、第何回目かはすぐに理解でき、学会の進展を振り返る上で都合が良く有難いものです。第５回目という一つの小さな節目にあたり、はじめて会員の所属する大学で学会が開催されたこと、米国から世界的にたいへん著名な大野乾先生をお招きして、魚類・両棲類時代の倍数体化による遺伝子進化の影響と題する特別講演が行なわれたことなど、たいへん意義深い学会でした。

今回の学術集会のポイントになったのは、無脊椎動物の生体防御のしくみに関する興味ある講演が聞けたことに加え、魚類の免疫機構についてある程度まとまったお話を伺うことができたことです。日本人にとって魚は常に食卓にある存在であり、たいへん身近な動物です。魚からクを除いた字（㐭）を、ク去った（腐った）魚と読みますが、これを食べると食中毒にもなります。だから、魚にもしっかりと生体防御してもらわなければなりません。こんな意味で、魚のマクロファージ、ＮＫ細胞、補体、異物認識などを学ぶことができ、収穫が大いにありました。これらの知見は養殖魚を魚病から守る上で役立つものと思います。とにかく魚と哺乳類の免疫系の共通性と相違性を少しでも知ることができ、ギョッ（魚）としたりでした。

想えば７年前、本学会設立に向け、皆様と一緒に行動を起こした

ことを思い出します。本当に学会を設立して良かった。それにしてもよくこれだけフランクで明朗快活な研究者がいろいろな分野から集まったものかと感心します。今後ともお酒を飲みながら愉快に楽しく歓談できるように、また一方で熱心・活発な討論ができますように祈ってやみません。古田恵美子先生のアイデアにより、懇親会では5年間連続して講演をして下さった方々に村松繁会長から感謝状が送られました。こうした心温まる配慮は会員の皆様にとって激励にもなり、節目にふさわしいものでした。

最近いろいろな先生から、近ごろの学生はテクノロジーの習得ばかりに熱心で、生物の不思議な現象には関心が薄い、とよく聞かされます。私も同様に感じますが、これは生物学の発展にとって憂慮すべきことかも知れません。ライフサイエンスは生命現象の純粋な謎解きです。生物の不思議な自然現象の緻密な観察から、生命現象に対する自分なりの疑問点を見出し、その疑問点を解明するにはどのような実験を組み立てればよいのか、また得られた実験結果をどのように解釈したらよいかをじっくりと考察できるようになることが重要であると思います。そして得られた実験結果が次の問題点を解析するときにどのようにフィードバックされるかを考えるならば、論理的に謎の本質にアプローチできると思います。この点において、本学会の研究はどれも生物学的アプローチによって生体防御という動物が持つ一つの側面を解明する立場を取っているので、学会は非常に貴重な存在です。私もカイコを中心に昆虫の防御機構を知りたく実験を行なっていますが、生命現象の謎解きに迫るべく、皆様と同様に実験を行なっていきたいと考えています。そうでないといつの日かカイコ（解雇）されるに違いありません。

学会会期中の休憩時間では、事務局のご配慮によりアルコールを飲みながら熱心に討論することができ、また深い親交をはかれることもできました。学術集会の会長が和気朗先生ということで、その名の如く、和気藹々、朗らかに過ごすことができました。最終日は台風のため出席者が少なかったと思いますが、終始活発な討論ができ熱気が伝わってきました。強い風雨の中、学術集会事務局の渡辺翼先生はじめ研究室の皆様には本当にお世話になりました。学会が成功のうちに終了できたのは皆様のお蔭と、心から御礼を申し上げます。

一つの小さな節目を過ぎ、次の節目に向かって学会が動き始めました。確実な足取りで発展していく比較免疫学会に皆さんと共に育てていきたいと思います。

日本比較免疫学会の５年間の歩み

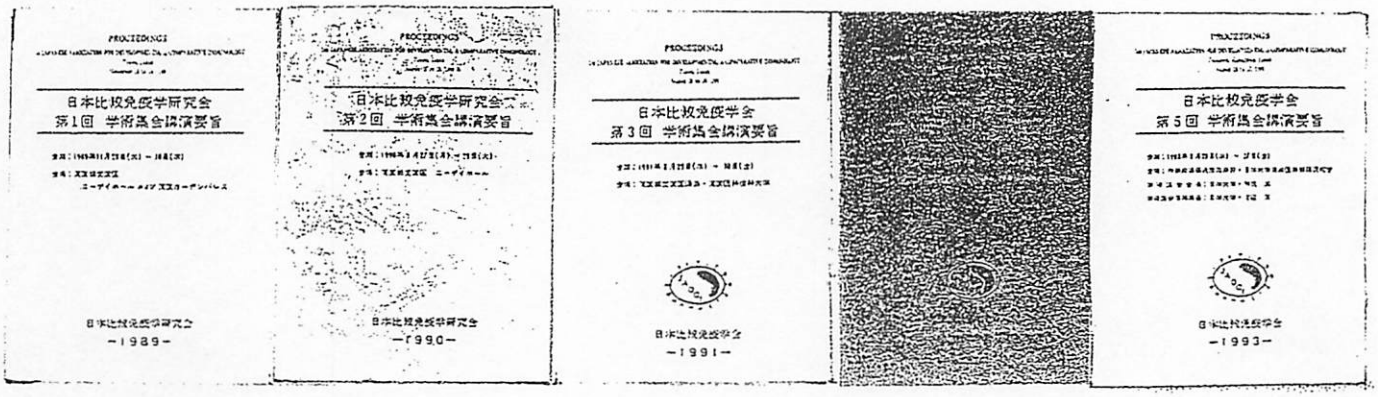
平成元年　日本比較免疫学研究会として発足した
第１回学術集会がエーザイホールで開催された
（シンポジウム：水産無脊椎動物の生体防御）
（特別講演：クーパー先生による免疫系の進化に関する講演）

平成２年　第２回学術集会がエーザイホールで開催された

平成３年　日本比較免疫学会に発展した
学会のシンボルマークが決まった
第３回学術集会が東京医科歯科大学で開催された
（招待講演：国内外の研究者による無脊椎動物の生体防御機構に関する講演）

平成４年　第４回学術集会が秋吉台グランドホテルで開催された
（シンポジウム：無脊椎動物の生体防御機構）
（招待講演：笠原正典先生による主要組織適合遺伝子複合体の分子進化に関する講演）

平成５年　第５回学術集会が日本大学農獣医学部で開催された
（シンポジウム：下等脊椎動物の免疫学）
（特別講演：大野乾先生による魚類、両棲類時代の倍数体化による遺伝子進化の影響に関する講演）



日本比較免疫学会第５回総会議事録

日時：１９９３年8月２６日
会場：日本大学農獣医学部
出席者：７５人（欠席役員：野本亀久雄）

学術集会会長挨拶（和気　朗）

今回の集会は8月２６日朝現在で、７０余名の参加者があり活発な討論がなされている。生物進化・系統樹のさまざまな動物におけるユニークな発表がなされており、本会が学会として独立独歩できる力を持った会であることを示している。３日間リラックスしてエンジョイしてください、との挨拶があった。

庶務会計報告（古田　恵美子）

＊ＪＡＤＣＩ学術集会の英文抄録のＤＣＩ掲載の件
第7回ＩＳＤＣＩ大会（オランダ）の事と合せて、友永副会長より報告してもらう。
＊昨年度の会費の納入は、良好であった。本年度の会費納入もよろしくお願い致したい。
＊Proceedings は全会員に送るので、印刷代・郵送料は会費より支出した。

以上の報告があった。

会計監査報告（渡辺　浩）

会計監査をした結果、適正であったとの報告があり、満場一致で承認された。

抄録委員報告（友永　進）

(1) 第４回集会の英文抄録が未だＤＣＩに掲載されていないことのお詫びとその理由など
＊Editor-in-chief のDr.Cooper が昨年退任し、次のEditorの決定までに時間がかかった。
＊次のEditorの意見を手紙で問合わせたが、返事は未だもらっていない。
＊米ＤＣＩが米動物学会より独立し、ＩＳＤＣＩのdivisionになるとのことなので、今後、米ＤＣＩのAbstractの件と合せてＩＳＤＣＩと交渉するつもりである。
＊もし我々のAbstractがＤＣＩに掲載されない事となった場合は、Abstract集（記録集）として出版したい。その際はreviewなども加えたい（個人的意見）。

(2) ＩＳＤＣＩ関係の連絡事項
＊会費が来年より４＄値上げとなる見込みである。
＊第6回ＩＳＤＣＩ大会はオランダのWageningenで開催される。多数の参加を願う手紙をもらっているので、JADCI 会員多数の参加を期待する。問合わせは友永まで。

(3) 第7回ＩＳＤＣＩ大会の日本での開催立候補について
＊１９９７年はＪＡＤＣＩ発足以来１０年位たつので、時期的には適当と思われる。
＊Abstractを掲載してもらっているので、われわれも何とか貢献したい。
＊一方、円高・宿泊施設（安い所がない）など、問題点も多い。
＊立候補とまではいかないまでも、日本で開催した場合の状況は、知らせておきたい。
＊日本以外ではSydney, Hong Kongなどの立候補が予想される。

以上の報告がなされた。

次期ＪＡＤＣＩ学術集会会長の件（村松　繁）

役員会で第６回学術集会会長は神谷久男先生（北里大学水産学部）に決定した。

次期ＪＡＤＣＩ学術集会会長の挨拶（神谷久男）

第6回ＪＡＤＣＩ学術集会を北里大学水産学部で開催する事になり、大変名誉な事と思っている。会期は８／２９（月）～３１（水）で、会場の三陸町は東京から新幹線などで5時間半で着く。それなりに楽しめる所なので、多数の参加を期待する、との挨拶があった。

次々期ＪＡＤＣＩ学術集会会長の件（村松　繁）

第7回ＪＡＤＣＩ学術集会会長は楠田先生（高知大学農学部）に内定している。

次期ＪＡＤＣＩ学術集会会長の挨拶（楠田理一）

一生懸命やるのでよろしく、との挨拶があった。

事務局より（古田恵美子）

来年のＪＡＤＣＩ学術集会は第6回ＩＳＤＣＩと重なるので、Abstract原稿、広告版下の締切りを早め５／２０必着とした。送付先は北里大学である。

本年度の会費納入方は、本日も会場受付で取扱っている、等の連絡がなされた。

役員会報告

1993年９月29日　東京新宿において
18:00～

出席者　村松繁，田中邦男，和合治久，小林睦生，山口惠一郎
中村弘明，古田恵美子　　菊池慎一，宍倉文夫（員外）参加

議題

１．次期会長候補の推薦
平成６年３月31日をもって、会長の任期終了につき、役員会では全会一致で、次期会長として村松繁氏（京大）を推薦した。

２．ＤＣＩへのAbstract掲載の件
ＤＣＩ編集長の退任により掲載保留になっていた第４回以後のＪＡＤＣＩAbstractが掲載されることとなった。今まで通りエキストラページとして掲載される。

３．次期会長選挙日程
12月25日〆切り
同封の投票用紙に１名単記で12月25日までに事務局古田恵美子あてにお送り下さい。